仏教企画通信
48号
発行日｜平成29年6月1日
発行所｜有限会社　仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989
発行人｜21世紀の仏教を考える会代表
㈲仏教企画代表　藤木隆宣
Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

偶感あれこれ

4　「童話」について

駒澤大学名誉教授　佐々木宏幹

たいへん恐縮であるが、自分の幼少時代の思い出を語ることから始めたい。

お寺で生まれ育った私は二歳のときに父を、三歳のときに母を失ったので、一人っ子として過ごす毎日であった。物心ついた頃には、母方の祖父母のお寺で暮らしていたが、いろいろと身辺の世話をしてくれたのは、お寺に住み込んで働いていた二人の女中さんであった。妙に神経質であったらしい私は夜、布団に横たわってもなかなか眠れなかった。ときに奇声を発したりすると、両側に寝ていた女中さんの一人がお伽噺をしてくれた。

「昔々あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいた。お爺さんは山に柴刈りに、お婆さんは川に洗濯に行った」と、童話の定型を語りだすのが常であった。話が面白くなると眠りにつくどころか、ますます頭が冴えてきてもっと聞きたくなり、その次は、その次はとせがみ立てた。困ったお姉さんたちは、「また明日ね」となだめてくれるのだが、なかなか寝つけなかった。

翌日の夜も、またその次の夜もお伽噺を頼むのだが、お姉さんたちも噺の種が尽きたらしく、同じ内容を繰り返すようになった。腹が立った私は側にあった火鉢の灰を掴んで、お姉さんたちに振り掛けてしまった。彼女たちの叫び声を耳にしたのであろうか、祖父が起きてきて私を布団から引きずりだし、怒りの形相で私のお尻をかなり強く何度も叩いた。いつも優しかった祖父が、そのときには鬼のように見えた。八十年以上経った今も忘れられない思い出である。

物心つくかつかなかい頃の子供にとって、お伽噺＝童話はかなり強い影響力をもっているように思われる。小学校の低学年の頃、アンデルセンの童話『人魚姫』を読んで、二・三日のあいだボウーッとしていた記憶がある。

すぐれた童話は子供（いや大人も）の想像力・空想力・構想力を高め強めることはまず間違いないように思うのだが、どうであろうか。子供のときに耳にしたり目にした童話は、その人の人生観や世界観の「根っこ」の部分の形成に著しく影響しているように思う。

たとえば、人生は楽しく幸せな道程であるが、逆に不幸せなコースでもあること、善いことを続けていれば旨くいくけれど、悪いことを重ねると禄（ろく）なことがないこと、たえず夢（理想）をもち続けると毎日が明るくなること、生きていく上で自分を大切にするのは当然だが、苦しんでいる人悲しんでいる人に救いの手を出すのは実に素晴らしいこと等々、童話の世界は無限に拡がっている。

忘れえぬ童話

幼少時代に歌った唄で、いまだに忘れられないものが幾つかある。その一つは「浦島太郎」である。この歌は一九一一年（明治四四）に『尋常小学校唱歌』に掲載されたものである。

「むかしむかし浦島は　助けた亀に連れられて　龍宮城に来て見れば　絵にもかけない　美しさ」が一番。次は「乙姫様のごちそうに　鯛やひらめの舞踊り　ただ珍しく面白く　月日のたつのも夢のうち」である。「浦島太郎」の物語は以下のとおりだ。

「むかしむかし、漁師の浦島太郎は、子供たちが浜辺で亀をいじめているところに出遭う。太郎は子供たちを説得して亀を助けて海に帰す。亀は感謝して太郎を海の中にある竜宮城に招いた。竜宮城では乙姫が太郎を歓待した。かなり時がたち太郎が故郷に帰りたい旨伝えると、乙姫は玉手箱を太郎に渡し、「決して開けてはなりませんよ」と注意した。太郎は亀に連れられて故郷に帰ってみると、太郎の知っている人は誰もいない。寂しくなった太郎は乙姫の注意に反して玉手箱を開けてしまう。すると箱から煙が立ち上り、それを浴びた太郎はたちまち老人の姿になってしまった。太郎が竜宮城で過した日々は数日であったが地上では長い年月がたっていたのである」。

歌ではこう唄う。「遊びにあきて気がついて　おいとまごいも　そこそこに　帰る途中の楽しみは　みやげにもらった玉手箱　帰って見れば　こはいかに　元いた家も村もなく　みちに行きかう人々は　顔も知らない者ばかり」。

「浦島太郎」という童話は「異界（他界）への憧れ」とでも言える、人が抱く遠くへの思い（想い）を骨子としているように考えられる。若者たちが海外旅行に熱心であり、宇宙旅行を願うのも、その例と言えようか。

奄美・沖縄には「ニライ・カナイ」と呼ぶ楽土（らくど）（安楽に暮らせる土地）の観念がある。それは海の彼方にあり、年ごとに神（赤また・黒またなど）が訪れ豊穣をもたらすという。「遠きところ」への憧憬は外

butsu48.indd 1　17/05/15 12:42

国においても異ならない。「山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ。噫、われひとと尋めゆきて、涙さしぐみかへりきぬ。山のあなたになほ遠く「幸」住むと人のいふ」（カアル・ブッセ、上田敏訳「山のあなた」）などその一つであろう。

もう一つ、子供の頃に姉さんたちから教わった童話がある。「花咲かじじい爺」＝「花咲かじい爺さん」である。概要は次のとおりである。

「むかしある山村に心優しい老夫婦と、その隣に欲張りの夫婦がいた。優しい夫婦は傷ついた子犬を見つけて飼い、自分の子のように可愛がって育てた。あるとき犬は畑の土を掘りながら「ここ掘れワンワン」と鳴いた。老人が驚いてそこを掘ったら大判・小判（お金）がザクザク出てきた。老夫婦はたいへん喜んで隣近所の人たちにも分け与えた。

これをねたんだ隣の夫婦は、犬を無理やり連れてゆき、財宝を探させたが出てきたのはガラクタばかりであった。腹をたてた隣の夫婦は犬を殺害し、飼い主に悪態をついた。悲嘆にくれた飼い主は死んだ犬を引きとって庭に墓を作り、その傍らに桜の木を植えた。木は短期間で大木に成長した。すると夢に件（くだん）の犬が現れ、「その木で臼を作りなさい」と告げた。夫婦は言われたとおり臼を作り、それで餅を搗くと金銀があふれでた。

それをねたんだ隣人夫婦は、無理矢理に臼を借りて餅を搗いたが、出てくるのは汚物ばかりであった。腹をたてた夫婦は臼を打ちくだいて燃やしてしまった。貸した夫婦は灰を返してもらい供養しようとしたら、再び夢にでた犬が、「桜の木に灰を撒いて欲しい」と言う。夫婦が枯れ木に灰を撒くと花は満開となった。そこを通りかかった大名が深く感動し、老人に褒美を与えた。また隣人夫婦は真似をするが、灰は大名の目に入ってしまい、二人は罰を受けた。

今でも憶えているのは次の歌である。

「うらのはたけで　ぽちがなく　しょうじきじいさん　ほったれば　おおばん　こばんが　ザクザク　ザクザク　いじわるじいさん　ぽちかりて　うらのはたけを　ほったれば　かわらや　かいがら（せとかけ）　ガラガラ　ガラガラ」（作詞　石原和郎・作曲　田村虎蔵、明治三十四年（一九〇一）。

「浦島太郎」は仏教流に言えば「無常」観と結びついているのではなかろうか。それにたいして「花咲か爺」はさしずめ「因果応報」、「善因善果、悪因悪果」の童話化となろうか。

現代のこの国では人々は幼少の頃から有名高校、有名大学、一流企業を目指して「奮励努力」することを要領よくそつなく世間を渡る人間が増えていきそうだが、はたしてそれが社会や国のためになるのだろうか。毎日のようにテレビや新聞に出てくる、考えられないような数々の出来事が既述のような事情とまったく無関係とは言えまい。現代の若者たちが「浦島太郎」や「花咲か爺」をよく知っているとすれば、私は「済みません」と言うほかないが。

『グリム童話』に学ぶ

最近、昔読んだ『グリム童話』を改めて読んでみた。昔の感動が甦った。なかでも「漁師と女房」が面白い。この物語は、「遠いむかしのことだ。漁師の夫婦がいた。浜辺のあばら屋に、ひっそりと住んでいた。漁師は毎日、釣りに出た。そして、ふたりは、かつがつに暮らしていた」に始まる。ある日漁師は大きなひらめを釣りあげた。ひらめは「いのちは、たすけてくれ。自分は魔法にかけられた王子だ。食べてもうまくはない。海にもどしてくれ」と懇願した。

漁師はひらめを海に戻した。漁師は手ぶらで家に帰ると、おかみさんが「漁はないの」と言った。漁師が事情を話すと、女房は「こんなあばら屋に住んでいるじゃないか。家を一軒くれと頼みな」と言った。漁師はしぶしぶ出かけていって、「出てこい、出てこいひらめの旦那、わしが女房の頼みを聞いてくれ」と呼びかけた。出てきたひらめに事情を話すと、ひらめは「帰ってみな」と言う。漁師が戻ると、こじんまりした家があった。二週間すぎると女房が言った。「石造りの館に住みたい」と。漁師はしぶしぶ出かけた。「出てこい、出てこい、ひらめの旦那」と呼ぶと、ひらめが現われた。事の次第を告げると、「帰ってみな」と言われ、帰ると石造りの大層な館がそびえていた。しばらくすると女房は「この辺り一帯をおさめる王になりたい」とせがんだ。女房は王になった。女房はさらに皇帝になりたいと主張し、皇帝になった。皇帝に満足しない女房は法王になりたいと訴え、法王になった。女房は法王に満足せず、ついに「神になりたい」と言い出した。漁師はふるえあがった。仕方なくひらめのところにいき、女房が「神になりたい」といっていると告げた。「帰ってみな」と言われて帰ってみると、住居はもとの「あばら屋」になっていた。（池内紀訳、ちくま文庫、一九八九）。

この童話が物語っているのは、人間のもつおぞましい「欲望の限りなさ」である。最後に神が出てくるところがいかにもヨーロッパ的であるが、グリムのこの童話は明らかに他の宗教にも通じる普遍性をもっていると言えよう。仏教の説く「煩悩」がグリム童話の内容とよく重なっているからである。仏教では百八煩悩などというが、グリムは「身心を乱し悩ませ正しい判断をさまたげる心のはたらき」とされる「煩悩」を、六段階に分けて見事に説きあかしている。

女房にそそのかされて、ひらめを訪ねる漁師の気の毒な行動である。

(1)「家が欲しい」
　→「こじんまりした家」
(2)「石造りの館が欲しい」
　→「立派な館」
(3)「王になりたい」
　→「豪荘な城」
(4)「皇帝になりたい」
　→「皇帝になる」
(5)「法王になりたい」
　→「法王になる」
(6)「神になりたい」
　→「元のあばら屋に」

ここでの漁師の女房の心は「取っても取ってもまだ足りない」の状態にある。動物以下であると言えよう。動物のなかには蓄えをするものもあるが、ほとんどは食にありつけると（満腹になると）、それ以上を求めないようだ。「もっと、もっと」と飽くなき追及を続けるのは、人間が最たるものの、このようである。人間＝人類のこの「飽くなさ」が「文化」や「文明」を創りだしたことは、疑いなき事実であろう。

「もっと、もっと」の追求性は相互の「奪い合い」行動となり、ついには「殺し合い＝戦争」という惨劇を生むにいたる。同時に文明は今や人類（いや全生命体）の生みの親である「母なる地球」をも危機に落とし入れている。「文明・文化の母体」である「地球」は人間の飽くなき「煩悩」に、どれだけ耐えうるだろうか。グリムも天国で心配しているに違いない。

われわれは今こそ、「ぼんのう煩悩むじん無尽」（尽きることなき煩悩）について再思再考し「煩悩無尽誓願断」（尽きることのない煩悩を滅しようと誓願する）を不断実行するよう努めようではありませんか。

西舘好子構成・文　親子でうたい継ぐ『子守唄のえほん』
チャイルド本社　定価1800円（税込み）

霊魂は死者の心であり、人格である

対談・佐々木宏幹×正木晃

霊魂はどこにいるのか

佐々木　お盆や墓参りと霊魂というものとの関係を考えますと、まずお盆には仏壇をきれいに掃除して精霊棚を作って、そこにお供物をそなえる。ご先祖の霊を迎えるということで、五日間ですか、親族がみんな集まってお参りしたものですね。

こういう風習もとくに都会などではだんだんなくなってきていると思います。どうしてそういうことをするかというと、先祖を祀るというのは実は人類に普遍の現象なので、先祖を祀らない民族などまず見られないということです。お墓参りでは、これは考えてみると矛盾するようですが、自分の家で位牌を祀って、朝夕、お線香を立てて拝む。であれば、先祖の霊魂はそこにだけいるのかというと、お墓でも拝んできます。そうすると普段、霊魂はどこにいるかということになってくる。

このごろテレビを見ていると、有名人の葬儀のニュースなどで、「どうぞ天国へ行って安らかにお休みください」という弔辞を、これも名の知れた人が平気で言っています。故人はキリスト教徒だったのかというと、坊さんの読経が流れていたりする。弔辞などで、天国という言葉がいつごろから使われてきたものか分かりませんが、「天にまします我らの神よ」と、キリスト教徒であれば亡くなったら神のもと、天国へ行くものとされます。仏教ではどうなのかということになると、これは大変な問題になりますね。

霊魂というものは一カ所ではなくて、いろんなところにいると、論理的には矛盾するようですけれども、そういうふうに考えないと日本人の宗教行動の説明がつかないわけです。それで、お盆になるとお坊さんが棚経という、檀家各家の精霊棚のところへ行って拝む。また仏教徒はお墓参りと称して、かなり遠くてもそこへ行って拝む。ですから、先祖の霊は両方にいて、さらにお寺参りで位牌堂というものがあって位牌があると、そこにも行っても拝む、霊魂はあちこちにいることになります。

合理的に考えると、亡き人の霊は、残された人々の心の中に、親であれ、夫であれ、妻であれ、宿っているということが一つ。宿っているならば何でお墓参りをしなくちゃいけないのかというと、心にもあると同時に、お墓には遺骨があるからそこへ行く。お寺に位牌堂があれば、そこにも行って拝むし、自分の家の仏壇に向かっても拝む、霊的な存在としての死者は複数の場所にいるといいますか。これはどう解釈しますか。

正木　一カ所だという感覚自体が近代的なものではないですか。

佐々木　そのとおり、そこですよね。

正木　人格でも、よく指摘されるとおり、近代的自我の確立が近代日本の大きなテーマだった個人があるという発想は魂が一個という発想とよく似ていて、それはヨーロッパの近代が生んだ一つの考え方にすぎず、もともとそうでない考え方だっていくらでもあったと思うんです。

浄土は修行用トレーニング・センター

正木　さきほどの天国というお話に絡めていうと、あの世というか、浄土というか、死者が往く場は、たとえていえば、トレーニング・センターなのです。浄土に行っておしまいではなくて、浄土には阿弥陀さんとか観音さんや勢至さんといった素晴らしいインストラクターがいて、その指導を受けられるので、そこで修行をするととてもよく修行が進むわけです。でも、そこで終わりではありません。法然上人は、自分はもともと浄土にいたのがまたこっちに来た、娑婆と浄土の間を何度も往復しているのだと言っています。そうやって一所懸命往復して、修行を積んでいるうちにどんどんレベルが上がって、最後は成仏できるという発想です。

佐々木　それでは、「あの世へ行ってゆっくり休んでください」というのは通じなくなりますね。

正木　そうです、取りあえずは少し休んで娑婆の疲れを取るのもいいでしょうが、ずっと休みっぱなしというわけにはいきません。そもそも浄土というところは夜がなくて、ずっと修行できるようになっているらしいので、そこで休んではいけないのです。ですから、あの世に行ったら頑張って修行してください、と言うべきです。死んでからまたトレーニングかよ？と言う人もいるかもしれませんが、難行苦行ではなく、やさしくて最高にすぐれた指導者のもとで楽しく修行できるトレーニング・センターだと思っていただくのが一番いいと思います。

やや余談めきますが、チベット仏教には、こういう面白い話があります。私にとってはチベット仏教の先生で、ダライ・ラマに大変近いツルティム・ケサン（大谷大学名誉教授）先生からうかがった話です。仏教は、チベット仏教でもスリランカでもみんなそうですが、輪廻転生という生れ変わり死に変わりを前提にしていて、いいことをした人は死後すぐに生れ変わる。あまりいいことをしなかった人でも四十九日以内には生れ変わることになっています。ですから、四十九日過ぎれば、死者は全部何かに生れ変わっているはずなのに、チベットにはロランというゾンビみたいな幽霊がいるというのです。ツルティム先生に、「全部生れ変わっていれば幽霊はいないはずなのに、何でゾンビみたいなやつがいるんですか？」とお訊きしたら、「時々うまくいかないやつもいる」という返事で、思わず笑ってしまいました。

これもチベットの話です。私は二〇一〇年に西チベットの奥地にあるカイラース（カン・リンポチェ）という、標高六千メーター近い聖地に行って来ました。空気は平地の半分以下しかありません。そこに五体投地をしながら巡礼している方々がいました。その人たちに「なぜ、こんな難行や苦行をするのか？」と問うと、「別に悟りを得たいわけではない。次にもまた人間に生れ変わりたいからだ」という答えが返ってきました。悟ってしまったらつまらない。最後は悟るかもしれないけれども、それまでにまた人間に生れ変わって楽しみたい。そのためには、今よりももうちょっと美男美女で、今よりももうちょっと金持ちに生れ変わりたいというのが本音のようでした。

あんなきつい難行をするのも、人間界に生れ変わるために、できれば今よりももうちょっといいレベルに生まれ変わりたいためだというのです。逆にここで苦行をしなければ下のほうに落っこちてしまうかもしれない。地獄とか畜生の世界とか、餓鬼とか阿修羅の世界に生れ変わってはたまらないので、そのためにこうやって巡礼している。生きているうちに、ある程度そういう功徳を積んでおく必要があるから、こういうことをしているという返事でした。

日本で仏教というと、どうしても悟りだとか何だとか難しいことを言いますが、今でも仏教が日常生活の中で完全に生きている世界の人たちはそんな難しいことを考えていない。実際はもうちょっと良いところに、もうちょっと良い条件に生れ変わりたいよね、みたいな話です。

お墓はなぜ必要か

佐々木　お墓と霊魂の話をもう少しつづけたいと思います

butsu48.indd 2-3 17/05/15 12:42

が、今の日本人の実態としてお墓にはあまり関心がないと、自然葬だとか何とかいって、海に持って行って遺骨を流してしまうというようなことを、いっときジャーナリズムが取り上げましたね。調べてみると何か特殊な人がそういうことをやっているだけで、それほど広がっていないようですが。それは例えばおじいちゃん、おばあちゃんが相当の年で亡くなったら、もうやむを得ないということであきらめ、納得するということになるでしょうけれども、仮に両親とか配偶者、あるいは子どもを亡くしたときには、とても耐えられないのではないでしょうか。一体どこへ行ったのか、消えてしまったのかというふうに。

それこそ、おじいちゃんおばあちゃんのお墓なんかいらないよと言っていた人が、自分の女房が亡くなったら、お墓だけは何とかつくらなくちゃいけないと、借金してもつくるといってお寺に相談に来たそうです。そこの住職が私に、「日本人というのは、先生、どうも奇妙じゃないですか」と言うから、それは日本人だけじゃなくて、なかなか理屈で死とは何ぞや、あの世とは何ぞやとこねておっても、身内の親しい人が亡くなるという契機で考えも変わってくる。逆に身近でそういう目に遭わないと、今の人というのは死者を大事にしようなんていうことを感じがたくなっているのかもしれないねと、そんな話をしたことがあります。

正木　私もだいぶ前に、夫婦でイタリアに旅行したときにご一緒したメンバーの中に、娘さんを若くして亡くされたご夫婦がいました。特に奥様はお子さんの死をまだ受けいれられていないようでした。たしかに不慮の死とか、まだ若くて、死ぬべき年齢でない年で死んだとなると、残された人はそれですべてなくなったとは考えられないようです。

佐々木　そうですよね。

正木　ええ、どこかに何かが残っているのではないかと思うようです。東日本大震災でもずいぶん多くの方が若死にしています。結局、そのことが今被災地で幽霊がたくさん出て来ていることとつながっている可能性があって、要するに先生がおっしゃるように、九十ぐらいの天寿を全うした形で亡くなるのは、それはおめでたいに近いことかもしれませんが、そうでない形で亡くなってしまったとなると、それで全部無に帰すというのは受け入れがたい、それは、たとえ現代人であっても、そうなのです。

もう一つ、これは奇妙なことですが、よく熟年以降の奥さんが、死んでまで旦那と一緒の墓の中には入りたくないと言っていると耳にします。死んでしまって何も残らない唯物論であれば、そんなことを言う必要はないはずです。ところが、死後の存在を完全には無視できないのか、死後も好きじゃない旦那としがらみがあると嫌だと思っているわけで、あれは不思議な感覚です。

佐々木　不思議ですね、本当に。

動物と一緒に墓に入れるか

正木　不思議といえば、私の知り合いのお寺さんで先日起こったことですが、ペットの遺骨を、自分が死んだときに、一緒に埋葬してほしいと言ってきたそうです。人の骨と動物の骨を一緒にするというのは、お寺としては、やはり抵抗があるそうです。結局、そういうことならと、同じ墓地の一角にペット用のお墓をつくって、動物はそちらに祀るということで一応納得してもらったといいます。とくに子どもがいないような夫婦の場合、ペットが子ども代わりになっているわけで、ペットと一緒に墓に入りたいという例がもう起きているわけです。非常に複雑な状態になってきています。

さっきの輪廻転生ではないですが、われわれも次に動物に転生するかもしれないと思えば、それなりに納得できるかもしれません。キリスト教の場合は、動物と人間を完全に分けてしまいますが、仏教はその点、かなり融通が利きます。また、こういう時代ですから、ペットの骨もご家族と一緒に同じ墓の中に入れられますよといったら、けっこう人が集まるかもしれません。

佐々木　そうですね。

正木　仏教のような輪廻転生系の宗教の場合は、われわれだって前世は何だったか分からないわけです。そういうことを繰り返しているはずですから、別に動物と人間を分ける必要はない。私、『ジャータカ』をちょっと必要があって、頭から尻尾まで翻訳されたものを全十巻読み通しましたが、インド仏教でもある段階までは、お釈迦様が前世で植物に輪廻転生しています。そういう記述を何カ所か見つけました。時代が降ると、植物への輪廻転生は消えてしまい、もっぱら動物への輪廻転生になってしまいますが、最初から動物への輪廻転生とは限らなかったようです。

佐々木　植物に、ですか。

正木　ええ、樹木の精にもなっています。ただ『ジャータカ』は仏教以前の話もたくさん取り込んでいますから、もともと仏教に植物へ輪廻転生があったとは言い切れません。ただ、もし仮に、植物への輪廻転生という発想があったとすると、インド仏教の中にも山川草木みたいな考え方をした時期があったのかもしれません。そうすると、昨今の樹木葬のようなことまで取り込める気はします。

佐々木　今のご指摘はとても大事だと思います。日本仏教のこれからを考える場合、草木国土悉皆成仏――草も木も大地もことごとく仏となるという思想が大乗仏教にあるので、それから見ると、草木国土に養われている一切の動物も植物も、大地まで成仏するわけですから、当然そういう思想というか、感覚が尊ばれるでしょう。

正木　なにしろ「悉有仏性」ですから。

佐々木　そうです、そうです。

正木　すべてのものが成仏するわけだから、すべてお祀りしてもいいし、すべてお墓の中に納めてもいいかもしれません。そうなると、人間だけが特別ではないということになってくる。私はもともと密教を研究しておりますが、密教のマンダラを見れば分かるように、真ん中に大日如来という根本があって、その根本の仏様が何百と描かれているすべての仏様を束ねているという発想です。実際に働くときは、それぞれの仏様が役割を分担しますが、全体でも一つになる。確かに、そういうのもありと思いますね。

鳥葬の国・チベット

佐々木　本題から外れますが、チベット仏教ということでお尋ねしますけれども、文化人類学者で川喜田二郎という人に、『鳥葬の国』という本があります。一時テレビに出たりして、もてはやされた人ですが、この鳥葬というのは今でもやっているんですか。

正木　それは普通におこなわれています。

佐々木　死体を裸にして置いておくと、鳥が寄って来てつついて食べていく。ちょっと日本人の感覚では考えられませんね。

正木　ですから、お墓に葬るべきものはほとんどないのです。鳥が食べやすいように、専門の解体屋さんが骨も全部砕いて肉と混ぜて団子にしてしまいますから。茶毘に付すといっても、材木がないので、できません。

佐々木　燃やせない。

正木　燃やしようがないわけです。チベットは、南端のブータンとか東側のカム地方を除けば、ほとんど樹木のない環境です。燃料になる木材が手に入らないのですから。子どもは水葬といって、川に流すことはあります。これは魚が食べる。それはそれなりの合理性があると思います。

佐々木　ダライ・ラマ法王が住んでおられたポタラ宮なんかの周りを見ると、荒涼たるものでしたね。

正木　今はずいぶん変わってしまいました。チベットやヒマラヤへは私も何だかんだ二十回行きましたが、初めて行ったころは殺伐たる世界だなと思いました。

佐々木　ポタラ宮の中というのは、たいへん立派なものでしょう。

正木　ええ、立派です。とくに歴代ダライ・ラマのミイラを祀る霊塔は、文字どおりキンキラキンの財宝の塊です。

佐々木　それは、今の共産中国も壊しはしなかった。

正木　そうですね、観光資源にしています。ポタラ宮というのは、もともと歴代ダライ・ラマの墓場で、その上に乗っかっているようなもので、中心はお墓です。お墓といえば、カイラースの巡礼路でも、途中に鳥葬場があります。なにしろ六〇〇〇メートル近いところですから、巡礼の途中

で亡くなる人もけっこういると聞いています。そういう人々を鳥葬にするので、そこは一帯に、その人が生前に着ていた服が散乱しています。でも、すっきりしていて変なものは感じませんでした。

佐々木　やはり鳥を養うというところで、仏教とつながってくる。

正木　最後の布施だという話もあります。私は実際の鳥葬の現場は見たことがないのです。ツルティム先生には、そういうところには行くなと言われました。「一般に言われているほどいいものではない、やっぱり忌まわしいもの、親族でも見たくないと言っているものなので、あなたも行くな」と言われました。千葉県の中央博物館の方と同行したときに、博物館から写真を撮るように頼まれたのでしょう、ラサの鳥葬場に行きました。そうしたら鳥に襲われたと言います。あるところまではじっと見ていたそうですが、ある境界を越えて、一歩踏み出した瞬間、ばっと大集団で襲って来たそうです。慌てて逃げ帰ってきたと言っていました。

土葬があったころ

佐々木　今から三十年ぐらい前、沖縄の調査をしておったころ、ある島で鳥葬じゃないけれども、亡くなると遺体を岸壁近くに敷いたゴザの上に置いてくる。それがすっかり骨になるまで毎日拝みに行くわけです。暑いものですから、だんだん腐ってきます。だから、においもあるでしょうが、家族ですからあまり気になりませんと言っていましたけれど、遺体は見なかったけれども、現場を見て何か異様な雰囲気を感じましたよ。

正木　チベットでも、寺によっては建物の内部に解体する場所があります。そこはやっぱり異様でしたね。タシルンポという大きなお寺さんへ、ツアーの一行を連れて行ったとき、大きなお堂の中から、突然、何人かが気持ち悪いと飛び出して来ました。どうしたのかと思って、入ってみると、そこに一・五メートルくらいの大きさの平たい石がありました。お寺の方に尋ねたら、そこが遺体を解体する所だったのです。

佐々木　私は東北の農村地帯の寺で生まれましたが、六十、七十年前には、その寺でも土葬と火葬と両方でした。土葬というのは、お骨にしないでそのまま埋葬して、その上にお墓を建てるでしょう。それが、二十年もたつと中の棺桶が腐るものだから、墓石が傾いてくる。気持ち悪かったですね。火葬の場合は、長さ二、三メートルぐらいの浅い穴を掘って、そこに遺体を乗せて、毛布か何かかけて、足のほうに少し油を注いで火を付けます。一晩中燃えているのですが、朝小学校に行くときそこを通って、友だちと眺めておったら、焼けた足がぎゅっと動いた、こうやって動いたのがまだ私の目に残っていますよ。当時は肺結核があり、栄養不足があり、痩せこけた人が多くて、その遺体も痩せていて男か女か分からなかったけれど、友だちとしばらく見ていたら炎から足が出て、怖かったですよ。

正木　そういう思いが、畏れとか、祟りとかにつながったでしょうね。有名な室町中期の寛正の大飢饉では、京都だけで十数万人餓死したと伝えられます。遺体が至るところにあったし、それが腐ってくるでしょうし、貴族の日記に臭くてたまらないと書いてあります。桂川はどうも遺体を捨てる場所だったようで、その川の曲がるところに、しゃれこうべが集まった、何百、何千と。十数万人餓死すれば、そういう風景がいくらでもあったと思われます。四条河原町あたりもそうでしょう、あの辺も遺体を捨てたと言われています。

佐々木　今でも不思議なのは、お寺では烏鳴きが悪いということをよく言いました。午前なり午後なりに、烏が三門のところへ来て、かあかあと鳴く。そうすると、「家の者が亡くなりました」と、お寺へ知らせが来るんですよ。烏というのは頭のいい鳥で、予言者みたいなところがあると言うけれども、何か臭いで感じるのかどうか分からないけれども、死者が出るときはどういうわけかお寺へ来て、「かあかあ」と鳴いた。それを「烏鳴きが悪い」と言っていました。

霊魂は死者の人格

正木　霊魂というものは、とくにテレビやジャーナリズムの世界で際物っぽく取り上げられるケースが多いですね。かつてヒットした「オーラの泉」なんかもそうですが、やはりまともじゃないというイメージで、ちょっと斜めな形で取り上げられてきました。その理由は何かというと、日本の近代化が唯物論中心で来たことに求められます。霊魂とか幽霊とか、そういう霊的なものは論じないというのはずっとあったわけで、取り上げるとなると、いわゆる際物になりやすい傾向が否めません。

例えば、明治時代の終わりから大正時代を経て昭和初期のころに、歌人の若山牧水がずいぶん日本中歩き回っていますが、神や仏についてほとんど歌にしていませんし、旅行記にも書いていません。その代わり、美しい自然を見て涙を流すという歌を作る。あの場合は、まさに山川草木が神や仏なのです。牧水をはじめ、明治の終わりから昭和の初めの時代に活躍した知識人にとって、神とか仏とか霊魂という言葉を直接出すというのはものすごく抵抗があったようです。それでも、牧水の場合、歌っている内容は山川草木悉皆成仏みたいな内容です。

そういうふうに、霊魂というものをまっとうに取り上げるチャンスを失ってしまったがために、かなり斜めな形で変なふうに論じられてきて、現在に至っている。だから、霊界通信とか霊と交信ができるというと、大体眉唾っぽくなってしまうわけです。

佐々木　霊魂とは何だろうと、僕も書いたりしゃべったりしましたが、やはり「死んだ後の人格」というふうにとっているんです。お坊さんも、駒澤大学だとか東大のインド哲学とかで勉強した知識人は、そういうものはないとおっしゃる。なぜならば、仏教では空といい無我というわけで、そんな霊的なものが存在する筈はないと、こう言います。ところが、一方のお坊さんは、それは違うと。われわれはお葬式をし、先祖供養をするのは人びとがそれを求めているからだ。だから、死後は無だということはあり得ないと言うわけです。

あるところでこの両者が大議論になって、私はそこでパネリストを務めておったのですが、司会者が、「佐々木先生、どう思いますか」と聞いて来た。僕の答えは「それはどちらも正しいです」と。一方で空、無我を説くのもそれは仏教の教義としては正しい。他方、おどろおどろしく祟りをするものを鎮めなだめるのもお坊さんの役割です。日本の仏教はその両方を持っているわけで、大概のご住職は、空や無我よりもむしろ、死者があの世で安泰に暮らせるようにという人々の求めに応じ、それを成仏させると、こういうことですね。

曹洞宗では、これこれを守らなくてはいけないという戒律がありまして、お葬式のときにその戒律を死者に授けます。そうして、戒を授けられたから死者は「仏の御子」になったということを唱えて、仏の子として葬送するわけです。送ったのだから祟りや障りはもうないかというと、それでも不満足なものは祟ったり障ったりするので、お坊さんはそれを供養し鎮める。これはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の物語の中にも出てきますが、やはり最後はお坊さんの力に頼って、それで鎮めてしまうというところが伝統的にあると思いますね。

信があるから証がある

佐々木　この祟りという文字がまた面白いですね。出るという字の下に示す、出て我を示すというわけです。幽霊が出て来て何日も寝られなかったので、ノイローゼになって病院に入ったなどというのは、私が小さいときにはよく聞いた話です。あいつらはろくなことをしない、先祖のこともほったらかしにしたから祟りがあって、あのようになったとか落ちぶれてしまったと。私の生まれた東北のお寺でもよく言っておったのは、ろくなことをしていないからああいうふうに傾いたとか、そういうようなことが当時の道徳というのか、一般人の倫理の骨格を作っておったように思う。

正木　その祟ったり障ったりする霊魂というのは、うまく成仏できなくてこの世に漂っているような霊魂ですね。そういったものと話ができるのが霊能者と呼ばれる存在です

ね。それこそ東北では霊と話のできるという人が今でもいますし、東京あたりでも拝み屋さんといわれる人がかなりの数います。

佐々木　います、います。

正木　そういうシャーマン的な存在を、少なくとも伝統宗教は拒否してきました。そういう存在そのものを、正統なところから皆排除してしまった。日本の伝統仏教は近代化の中で、その部分を全部切ったわけです。表だって論ずることをしてこなかったし、そういうことをやるのは本当の仏教じゃない、みたいなことでずっと主張してきました。ですから、その辺のことを正面から取り上げて、きちんと語ってくれる人が意外にいないというのが大きな問題だと思います。

もう一つ、近代化の中で科学がすべての価値基準の中心に座ったために、科学的に証明できないものは信じられないということになってしまっています。

佐々木　そうです。そこはとても大事な点ですね。

正木　目に見えないものは駄目。物理的にきちんと証明できない限りは、存在は証明できないから信じる意味がないというのです。結論だけ申し上げると、キリスト教のほうでははっきり結論が出ておりまして、科学と宗教は別の領域のものであって、お互いに利用し合うとか非難し合うような関係にはないということです。科学的な真理と宗教的な真理は両立する、これはほぼ共通見解です。

キリスト教ということでついでに申しますが、今話題になっている遠藤周作原作の『沈黙』という映画は、一神教が日本に入って来ると一神教本来の厳格な性格を失って、日本的な風土や習俗の中に溶けていってしまうというテーマをとりあげています。この点に関連して言えば、かつて私は、国際日本文化研究センターで開催されていた、キリシタン研究をしている先生たちとの研究会に参加していました。そのとき、隠れキリシタンは、二百五十年ぐらいの間に本来のキリスト教とは似ても似つかない、あえていえば、民俗的な宗教に変容してしまったという事実を知りました。これは『沈黙』と一脈通じると思います。

ところで、親鸞聖人に有名な『教行信証』という大著があります。注目すべきはこの書名です。教えがあって行いがあり、信じるから証明されるという順番です。ところが科学では、まず教えがあって、何らかの実験をして、証明されてはじめて信じる、ということですね。宗教は逆で、まず信じなければ証がない。そのことを呑み込めれば、宗教に対する考え方は違ってきます。しかし、科学的な、要するに証明されなければ信じないというところで固まってしまうと、そこで話がストップして、じゃあ宗教は要りません、ということになってしまうのです。

唯物論者も盛大な葬儀をする

正木　いつも不思議に思うのは、そういうがりがりの唯物論の人が、人生の残り時間が少なくなると、突然お墓の問題を言い始めたりする。宗教学者の山折哲雄先生は私の恩師ですが、もともとマルクス主義者だったので、昔からの友人には左翼が多いわけです。そういう人たちがこの間集まって話をしたときに、山折先生に、どこか良い寺がないか、良い墓がないか？と尋ねたそうです。先生が「だって、あなたは今でもマルキストだろう！」と言ったら、それとこれは話が違うということになったそうです。

また、新潟三条に妙光寺というお寺があります。いわゆる安穏廟の創始者で、先日も日本経済新聞が発刊している雑誌で、日本一の永代供養墓に選ばれています。ご住職は小川英爾さんといって私の友人ですが、小川さんに言わせると、不思議なことに、共産党員のお墓がたくさんあるそうです。

佐々木　そうですね、共産党員が亡くなったから無宗教葬かというと、ずいぶん盛大な葬式で送ったりしていますものね。

正木　日本の共産党員というのは真面目な人が多くて、ちゃんと墓守をするそうです。思想信条と宗教は別だということでしょうが、そもそもスターリンとか毛沢東の遺体とか、金日成の遺体をなぜあああやって保存するのか？。そして礼拝するのか？。あんな馬鹿でかい銅像を造って拝んでいるというのは、別種の宗教というか、とにかく宗教と全く無縁とはとても言えません。完璧に唯物論でいくのであれば、それはそれで偉いと思いますが、どうもそうはいかないようです。何かを崇めてしまうというのは人間の心の中に根強く残っているのだと思います。逆に言えば、唯物論でも宗教は成り立つかもしれません。

もっとも、仏教では逆縁という考え方があります。仏教を信じない、あるいは誹謗中傷することによって、逆に縁がつながってしまうという発想です。信じるだけがすべてではなくて、批判したり誹謗したりすることが逆にその宗教を深く知るきっかけになるという論理です。それを考えると何かきっかけさえあれば、唯物論がどこかでころっと変わる可能性もあります。これは宗教人類学の領域でしょうが、人間は聖なるものとして何かを崇めていないと安心できない存在ではないですか。

佐々木　そうです、そういうところはありますね。普段、私は「無宗教ですよ」といっていたのが、正月には明治神宮に三百万人も行くそうです。何でそんなにと聞くと、一つの答えはみんなも行くからと、それからやはり自分と家族の安泰を願うからと。

正木　その、何かを崇めたいという願望ですが、人は俗なものだけで生きていくのはけっこうつらくて、聖なるものというか、とても大事なものを想定して、それを崇めるという行為は人間の本質にあると思うのです。

佐々木　そう思いますね。初詣の人たちの願望はもっと軽いものかもしれませんが、その崇めるべき何かあるものを辿って行けば、今日のテーマの霊魂につながってくると思う。それは目に見えない存在で、ずっと永久に続くようなものでしょう。子どもの頃、あいつは「モノ」につかれたという話をよく聞きました。それは気が少し変になった、悪い言葉で言うと、狂人とか気ちがいということですが、そういう人たちはモノつきといわれた。カタカナでモノというのが民俗学では大事なので、どういうモノかというと、そのモノは丸くて、空中を飛んだりしているし、霊能者は見ることができるという。

そういう話を子どもの頃聞きましたけれども、何かさっきの崇りとか障りとかいう話から、当然宗教に引っかかっていると思う。そうでないと説明が付かないと思うんですね。

運不運ということ

佐々木　思い出すのは、御巣鷹山の日航機墜落事故ですが、もう三十年になりますか、五百二十名が亡くなって四人だけ全く奇跡的に助かった。私はそのときにニュースで見ておったんですけれども、小学六年生のおかっぱ頭の女の子がヘリコプターに釣り上げられていく、その姿は今でも目に焼き付いています。そのときに、新聞などでも特集があって、生き残った人を追っかけて、その感想を聞いていた。そうしたら、その答えが、「運がよかったんですよ」と、こう言うわけです。

その運とは一体何だろうというと、今問題にしている霊魂のように非常に大事な問題になりますが、運の定義というのは非常に難しくて、何と言ったらいいか、「めぐり合わせ」と言いますか、そういうものが宗教の根幹にあると思います。なかなか論理的にうまく説明できないけれども、とても否定はできないような、あの人は幸運だ、幸せだとか、逆に彼女は不運だという、その運ですね。具体的にはいろんな事例を挙げることができても、そこから「運で、何や」と言われたら、ぱっと答えられない。宗教の中には、そういう曰く言い難しみたいなものが根っこにはあると思うんです。

教理中心の宗教というのは、仏教にしても合理的にできておりますけれども、私が「生活宗教」と言っている、庶民の生活の中に生きている宗教の中には、曰く言い難しというものはごろごろあります。運のように、科学的には説明できなくても、人生の大事に働いているということがある以上、合理だとか非合理だというだけでなく、やはり宗教というものにどうしてもどこかで頼らざるを得ない。あるいは、それを宗教と言わなくてもいいわけだけれども。

正木　結局、運が良いということは、前世で善いことをしていたからそうなったと、仏教ではそういう形で説明してきたわけです。仏教は合理的に考えるところがありますから、何かの原因を求めて、原因があるから結果があるという発想をします。そうすると、過去の時点で善いことをした人は結果的に恵まれるし、あまり善いことをしなかった人は恵まれないという結論になります。当たっているか当たっていないかは別として、そういう説明の仕方をしてきたのです。

ただ、因果という言葉は、日本ではあまりいい意味で使われてきませんでした。しかし、本来は善いことをすれば善い報いがある、という考え方が主流だったようです。だから今、善いことをしておきなさいという話になります。歴史上のお釈迦様という方は出家して、あらゆる絆を絶ってしまって、徹底的な瞑想修行をすることを、弟子たちに要請しました。しかし、その要請を実行するとなると、大変です。まず現実問題として、古代インドで出家する際は、その人が出家して、文字どおり家にいなくなっても、その家族、とくに両親が生涯ちゃんと暮らせるだけの財力がなければ、出家は認められなかったからです。お経によく「良家の息子よ」という呼びかけの言葉が出てきますが、本当に良家の息子さん以外は出家できなかったと指摘されています。

そういう境遇にいる人というのはめったにいませんね。だから、お釈迦様も一般の在家の人たちに対しては、「今生きている間に一生懸命努力して、善業を積みなさい。そうすれば、来世で出家できるような境遇に生れ変わることができますよ」と説いています。そういった意味でいくと、善いことをしておけば次に善いことがあるというほうが悪いことをすると悪いことがあるよりは、因果という意味の中心だったということです。

戦没者の慰霊は国家的行事

佐々木　霊だ、魂だというと、それこそおどろおどろしいというようなことで、インテリほど嫌いますけれども、日本の国家行事の一つである、八月十五日の日本武道館を使っての全国戦没者慰霊祭があります。必ず天皇が臨席して、そこでお悔やみというか、お言葉なるものを述べる。その祭壇には墨痕鮮やかに、「全国戦没者是霊」と書いてあるわけです。ほかに書き様がない。だから霊というのは、ああいう国家規模の行事で生きて使われている言葉です。われわれは、決して軽く扱っちゃならない言葉だと思う所以です。

正木　ですから、霊魂というのは死後の存在というか、死後も生きている何か。それは目に見えないけれども、場合によっては、修行を積んだ方であれば、その感性でとらえられることも無きにしも非ずという対象と言えます。そういう意味では、亡くなった人の何かと、生きているわれわれが共存している世界があったほうが望ましいと思います。

佐々木　そうですね。

正木　先年来、天皇と皇后のお二人が、東南アジアを回って、あちこちで戦死者の慰霊をされました。

佐々木　慰霊、つまり霊魂を拝みに行っているわけです。

正木　欧米でもそうじゃないですか。たとえば、一国の首班がアメリカを訪れると、必ずワシントン墓地などに行って、戦没者の霊を慰めます。

佐々木　すべて慰霊です。

正木　慰霊をしないと、外交的な非礼になるのでしょう。それこそ共産圏でもおこなっています。じつに興味深い事実です。

佐々木　ところが、わが日本ではインテリにたたかれるものだから、お坊さんが慰霊をするのを憚ってしまっています。曹洞宗では坐禅だけは大事にしているけれども、坐禅は本当に道元禅師の命ですけれども、ふだん寺院に来る人の八〇パーセントは葬式・法事のために、坐禅に来る人は四～五パーセントぐらいしかいない。そうすると、こっちは葬式、こっちは坐禅というふうに分けすぎるのは無理で、禅宗の場合にはそれを重ねたほうがいいのではないかと、そういう意味の文章を「宗報」に書いたことがあります。

例えば、お葬式では無理かもしれないけれども、初七日、四十九日、百か日だってやるじゃないですか、そういう集まりで、仏さんになっている亡き人は今あの世へ行って、これは教理的にそうなんですが、坐禅をしていらっしゃる。だから、皆さんも足を組む必要はないけれども正座をして、目を半眼に開いて、それで落ち着こうじゃないですかと。五分か六分してもらい、これが曹洞宗の教えの根幹ですよということを一言言ったらどうか。そうすれば、葬祭と坐禅は別だなんて分ける必要はない、そんなことを書いたことがあります。

葬儀は宗教に触れる契機

正木　先ほどお話した小川英爾さんは日蓮宗の僧侶ですが、本山とはほとんど関係のない人です。その方が何年か前に、お金持ちの檀家から寄付していただいたお金で、境内に新しいお堂を建てました。そのお堂は何のために使うかというと、遺族の方がご遺体と一緒に二日間過ごすために使います。そして住職が、時間が許す限り、同席します。そこで本当の意味の通夜説教をする。そうすると何が起こるかというと、当事者が檀家ではない信徒の場合でいえば、ほぼ百パーセント檀家になるというのです。葬儀を契機にして仏教に触れるという過程は、檀信徒の心にとても大きな影響をあたえるのです。

佐々木　大きい、本当にそうだと思います。

正木　その間、食住はお寺が面倒を見るそうです。二日間で住職と遺族の方とご遺体という三者にあいだに、宗教的な世界が開かれていきます。妙光寺は、さきほども申しあげたとおり、日本一の永代供養墓と高く評価されています。しかし、立地条件は最悪です。大変な僻地にありまして、交通の便が非常に悪い所にもかかわらず、檀家の数は増える一方です。小川さんはひと月のうち一週間は東京にいますが、その理由は東京でもどんどん檀信徒が増えているからです。

それからさっきおっしゃった生活宗教について言わせていただけば、仏教とかキリスト教のようないわゆる立派な宗教の下のほうに、譬えは悪いのですが、ブラックボックスというか、掃きだめというか、とにかくいろんなものが投げ込まれている層がある。その上に立派な宗教が乗っている構造だと思うのです。生活宗教は、その下の部分と関わっている。日本の場合は、そこに大乗仏教が入ることで多くの人が救われてきました。つまり、下の方がぐちゃぐちゃのままではいかんせん収拾が付かず、方向性も決まらず、とかくすると暴走しかねないので、仏教の考え方や儀式を導入して宗教としての形を整え、多くの人々を救ってきた歴史だと考えています。

佐々木　おっしゃる通りだと思います

正木　儀式というのは決まりきったことをやるわけで、いま流行のルーティン・ワークの典型例です。決まったことを繰り返すというのは、人間の心と体にある種いい影響を与える可能性があると言われています。決まりきっているだけに、つまらないといえばつまらないですが、それを繰り返すことで何か良い結果が得られるという発想ですね。「心だけでいいよ」ではなくて、やはりそれは行動に表さないとうまくいかない。葬儀とか法事は典型例で、ただ心の中でお経を唱えていればいいのではなく、実際にお坊さんを呼んだり、お線香をあげる、そういう行為がとても重要だと思うわけです。頭だけでなく体を使う、心と体が一体化することで、そこで違うものが生まれる。これは大脳生理学の人がよく指摘する、まさに科学的な事実です。アップルのジョブズが乙川老師に帰依していた理由というのも、その辺のことからでしょう。彼の発想の中にそれが強くあったと言われていますね。ジョブズは新製品を開発する際、市場調査をいっさいおこなわず、坐禅を通じて自分の中に芽生えた直感だけを頼りにして、大成功したのです。

佐々木　今日は内容が豊富で大変深い話し合いになったと思いますが、最後にあらためて霊魂とは何かとなると、それは死んだ人の心、死んだ後の人格、そう言ってよろしいですね。

正木　そう思います。

仏教企画通信

ご支援寺院名
H29.2.1～4.30

所在地	寺院名（個人名）	金額
埼玉県	曹源寺	10,508
合　計		10,508

手まり学園

寄附者御芳名
H29.2.1～4.30

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木 義次	6,000
東京都	砂金 智佐	3,000
東京都	慈眼寺	10,000
神奈川県	随流院	10,000
群馬県	隆興寺	5,000
愛知県	医王寺	10,000
茨城県	龍泉院	10,000
静岡県	養勝寺	10,000
三重県	大蓮寺	10,000
島根県	正法寺	5,000
千葉県	松﨑 文秀	20,000
栃木県	満福寺	10,000
愛知県	宝生寺	10,000
東京都	秦 雅子	10,000
秋田県	円通寺	5,000
東京都	天寧寺	10,000
神奈川県	甘利 弘子	5,000
千葉県	宗胤寺	10,000
青森県	大乗寺	10,000
東京都	砂金 智佐	3,000
宮城県	通大寺	10,000
埼玉県	吉祥院	20,000
神奈川県	青木 義次	6,000
東京都	田中 洋子	2,000
埼玉県	曹源寺	10,000
東京都	山本 峯也	30,000
愛知県	永澤寺	10,000
山形県	天性寺	5,000
岩手県	大光寺	10,000
愛媛県	高昌寺	20,000
静岡県	龍雲寺	5,000
東京都	砂金 智佐	3,000
静岡県	宿蘆寺	10,000
岩手県	長福寺	5,000
東京都	大田 美和	20,000
合　計		338,000

（★部数により割引があります）　すべて税別価格です

仏教企画発行の刊行物

『修証義』解説	丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』	長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』	文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『道元禅より見たる般若心経解説』	長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』	長井龍遺著	30円
『わが心の釈尊伝』	須田道輝著	1,800円
修証義読本『生老病死』	須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』	須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』	霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』	霊元丈法著	150円★

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

＊送料の一部に変更がございます。何卒ご理解を賜りたく思います。

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み

仏教企画

〒252-0113　神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641　FAX: 042-783-0989　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは　①ご寺院名　②お客様番号　③電話番号でも可能です。

編集後記

多々良問題の整理がまだついていないこの時期に苫小牧駒沢大学の経営移管問題が起きた。

さて、どうしてこのような問題が起きてしまったのか考えてみたい。

苫小牧駒澤大学は平成20年以降毎年二億五千万円の赤字を出しており本校が補てんをしていたようだ。

このことは当事者（理事会や駒沢大学関係者）にとっては頭の痛い問題だったに違いない。

しかし宗報5月号によれば、新学部の設置により学生が集まりだし、経営が上向くことに期待された時期での突然の経営移管事件であるようだ。なぜこの時期に経営移管を慌てたのだろうか。新しい学部が実を結ぶまでには当然時間が掛かる。詳細はまだわからないが、理事者は経営移管先である京都育英館との約束を果たそうと急ぎ動いたようにも見える。理事者側は早く事実関係を明らかにして自分たちの行動の正当性を示してほしい。

幸い本校は歴史と伝統があり都心で交通の便も良いことから、少子化の中でも受験者の数は減らないようだが、本校だって何の手を打たずにいつまでもこの状態が続くとはとても思えない。

他大学の取り組みを見ると仏教系では東洋大学は社会学部を充実させている。龍谷大学は農学部を設置して時代を見ている気がする。次世代に必要な学部の設置についてはどの学校でもプロジェクトを立ち上げ苦心していると思う。

駒沢大学ではどのような人がかかわり、どのような議論をしているのだろうか。曹洞宗の弱いところは宗門以外の優秀な人材を取り込んでいないことであろう。いかに宗門は社会との接点に乏しいことか。東洋大学では塩爺こと、塩川正十郎氏（故人）を総長に引っ張り出した時にはさすがと思ったことがあった。塩川氏は人材を呼び込み、そしていまの東洋大学がある。

大学経営は素人には難しい時代だ。しかし時代を見る目をしっかりと見据えることにより素人が多い宗門関係者でも経営者になることは可能であると考える。宗門は今回の事例を生かすことが大切である。時代を見据える人材育成である。

学校法人京都育英館とはどのようにしてつながったのかは知りたいところである。また経営移管はどのようなメリットがあるのだろうか。赤字がなくなることはあるが、経営移管後はもう何も生まれない。

苫小牧市や開校に向けてご尽力いただいた多くの方たちにはどのような説明ができるのであろうか。市長他が遺憾の意を表明されたという。信用失墜である。

宗報の5月号に「苫小牧市との約束で無断では譲渡できないのではないか」とある。とすれば苫小牧市の意向をたしかめることが大事だ。曹洞宗として移管阻止に向けて動くのであれば、市も歩調を合わせてほしい旨を誠意を持って伝えるべきであろう。

ここに至っては、理事会、評議員会は正当に進められたのかなどを、我々に「合同特別号2」にて発信してほしい。